

2025年度第3回 JWDA会員向け／福岡視察会 報告書



【実施要項】

日時：2025年10月23日(木)～24日(金)

視察先：福岡県 八女市(八女森林組合、八女市役所)

大川市(モリタインテリア工業)

筑後市(九州木材工業)

太宰府市(大宰府天満宮、スターボックス)

福岡市(警固竹友寮、マルホン福岡ショールーム、おもちゃ美術館)、

福岡市(ららぽーと福岡)「WOOD DESIGN EXPERIENCE@福岡」

参加者：24名

主催：一般社団法人 日本ウッドデザイン協会（協力：株式会社エイチ・アイ・エス）

【目的】

■地域産材の積極活用に取り組んでいる地区のひとつである福岡県の川上から川下に至る主要拠点や建築物を幅広く視察し(八女市、大川市、太宰府市、福岡市)関係者と交流を図ることを通じ、会員のビジネスに活かす「気づき」を得る。

【スケジュール】

10月23日(木) 八女市→大川市→筑後市

- 10:40 集合 福岡空港到着口／北
11:00 福岡空港発(協会手配バスにて)
12:00 昼食
13:00 八女森林組合、八女木材共販所
八女森林組合様 解説付き視察
14:05 八女市庁舎(不燃木(ふねぎ)、地域材活用建築物)
15:20 モリタインテリア工業様(早生広葉樹センダン家具の取組)
モリタインテリア工業様 解説付き視察
16:25 九州木材工業様(不燃木(ふねぎ)、エコアコールウッド製造メーカー)
九州木材工業様 解説付き視察
18:15 ホテル着 ルートイン博多駅前(個室・朝食付き)
18:45 懇親会(会員間交流)

10月24日(金) 福岡市→大宰府市→福岡市

- 9:00 貸切バスにてホテル出発(8:50 集合) ①班と②班に分かれて視察
9:20 ①竹中工務店警固竹友寮(2023年 WD 賞受賞作品)
竹中工務店様説明付き視察
9:30 ②マルホン福岡ショールーム
(2020年 WD 賞受賞作品
第7回福岡県木造・木質化建築賞 大賞(木質化の部)受賞作品)
10:05 ①マルホン福岡ショールーム(2020年 WD 賞受賞作品 第7回福岡県木造・木質
10:25 ②竹中工務店警固竹友寮(2023年 WD 賞受賞作品) 竹中工務店様説明付き視察
11:30 昼食
13:00 大宰府天満宮令和の大改修(作業所見学) 竹中工務店様説明付き視察
大宰府天満宮仮殿 外より見学
スターバックス大宰府天満宮表参道店(隈研吾事務所作品) 外より見学
福岡おもちゃ美術館視察
16:00 協会展示(ららぽーと福岡)視察
17:00 バス移動
17:20 福岡空港 解散

【視察 1 日目 10/23 八女市→大川市→筑後市】
都市部と山間部の両面を活かした福岡県の林業政策

福岡空港で集合から始まった福岡視察会。

まずは、一路八女市までバスで向かいました。



車中にて昼食。お弁当は八女市の業者さん

空港から八女市まで約 2 時間。

道中、福岡県の欧倫水産部林業振興課 課長補佐 加賀稔子様と木材流通係 脇坂 美紀様から、福岡県の林業政策についてご説明いただき、都市部と山間部の両面を活かし取り組んでいるワンヘルスについてのご説明がありました。

福岡県は、九州の中では森林率約 44%と中位に位置し、木材生産量では熊本・宮崎などに続く地域ながら、都市圏と山間地域の両面性を活かした林業政策を展開しています。県内では、八女・筑後地域を中心とする木材産業の再構築や、再造林支援、森林環境譲与税を活用した地域林業の担い手育成など、「使って、守る」循環型林業のモデル形成が進められています。



林業施策では、意欲ある経営者の登録や森林所有者との連携を通じ、持続可能な森林経営を支えています。低利融資や補助金による作業道や機械設備の整備も後押しされ、小規模・分散所有の森林を集約して施業する地域活動支援制度により、木材生産と森林の公益

的機能の両立も図られています。

都市近郊の森林利活用の例として、太宰府市の四王寺山には「ワンヘルスの森」が整備されています。ワンヘルスとは、人・動物・環境の健康を一体として考える理念で、森づくりや生態系保全にも応用されます。この森には 600 種以上の動植物が生息し、間伐や広葉樹育成による管理が行われています。ビデオでは、森の中で整備作業が行われる様子や、市民が自然に親しむ姿が紹介され、林業と市民利用がバランスよく組み合わせられていることを実感できました。



ワンヘルスについては車中にてビデオ視聴をしました。

<みんなで守ろう！生物多様性と私たちの未来～ワンヘルスでつながる地球～【福岡県】>

https://www.youtube.com/watch?v=i_5N8GOG3Cw

この説明から、福岡県の森林施策は単なる木材生産にとどまらず、林業経営、環境保全、地域利用が統合された総合的な取り組みであることが確認でき、視察先での観察に向けた理解が深まりました。

【八女森林組合、八女木材共販所視察】

八女はひとつ。複数組合の力を束ねた「八女モデル」八女森林組合の現場



“八女はひとつ”を合言葉に八女地域の豊かな森林を活かすため、八女、八女上陽、立花町及び広川町の4森林組合が合併し、発足した組合です。

かつて独立して存在していた八女森林組合・八女上陽森林組合・立花森林組合・広川森林組合の4組合が2014年に統合し、地域一体で森づくりを進める「広域型森林組合」として再編されたそうです。

統合の背景には、

- 担い手不足の深刻化
- 管理の効率化の必要性
- 施業の分散による非効率
- 森林を地域全体で守る体制づくり

といった課題をまとめることの説明を受けました。

実際に現場を歩くと、この“統合の効果”が随所に現れていると感じました。職員や現場スタッフは世代や経験が幅広く、互いの知見が自然と共有されている様子が見受けられました。



また、施業計画が広いエリアで一元的に管理されているため、作業や機械配置の効率が良く、地域全体を「面」でとらえた森林管理が実現していました。



森林組合で市場を持っているところはほとんどないとのこと、入札登録をすれば誰でも買い付けができるとのこと。取引先は主に製材所になっているとのことでした。

担当者の方からは、

「単独の組合だった頃とは、施業の進め方も木材の出し方もまったく変わりました」という言葉もあり、合併後の変化が現場レベルで確かな手応えとして感じられていることが伝わってきました。



このように、森林組合が丸太の管理だけでなく市場も運営している例は少ない中、福岡では宮崎や鹿児島のように大径木が中心ではありません。しかし、複数の森林を集約し一元管理することで、建築用に必要なサイズの丸太を安定的に出荷できる体制を整え、市場も開放することで、木材利用の促進につなげたい、とのお考えを伺いました。



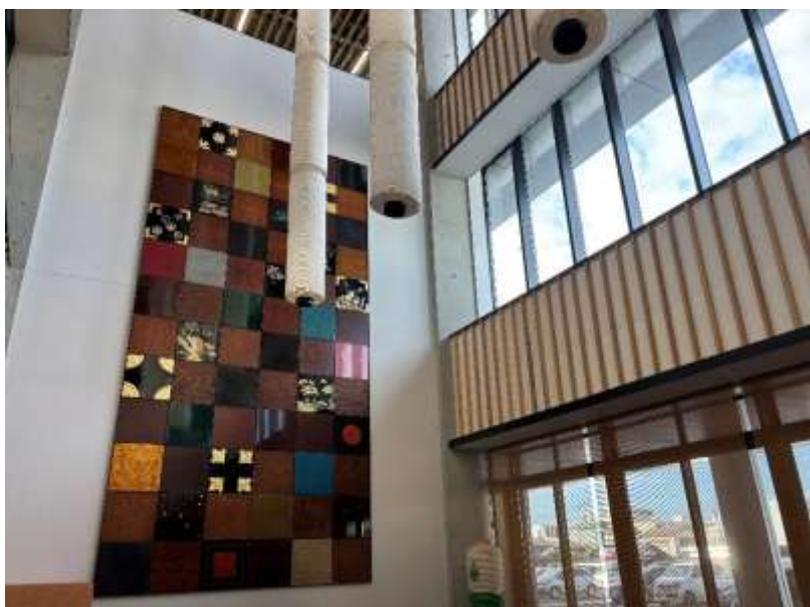
人材の共有や小さな組合などから運び込まれる木材の量により八女森林組合は、統合によって単に規模が大きくなっただけでなく、“広く・深く・長期的に森を守る力”を獲得した組織へと進化したという印象を強く持ちました。



八女の森が息づき、光が舞う庁舎



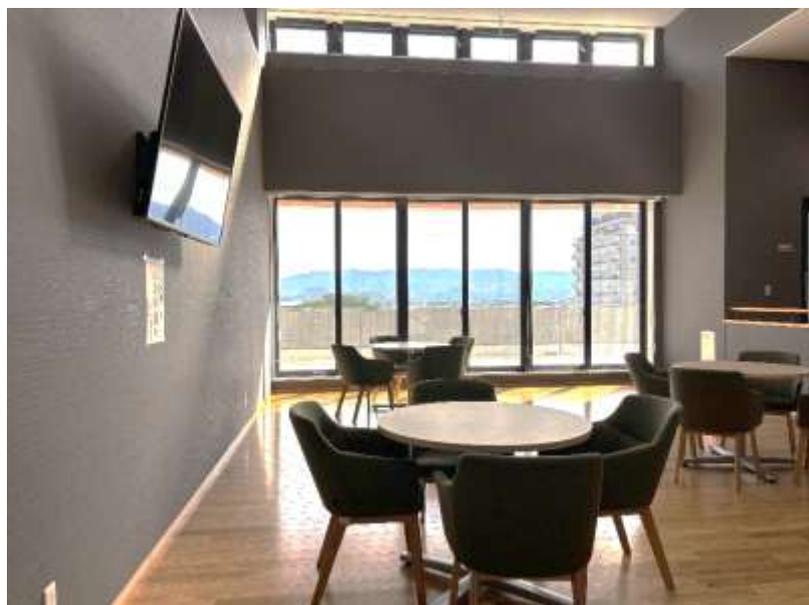
八女市の新庁舎は、地域材である 八女杉(八女材) をふんだんに活用した木質化建築として、2024年5月に完成しました。外観の木製ルーバーや内部の床・天井・壁には八女材が用いられ、光が差し込む空間に木の温かみが溶け込み、伝統的な町家の意匠を現代的に再解釈したデザインが印象的です。



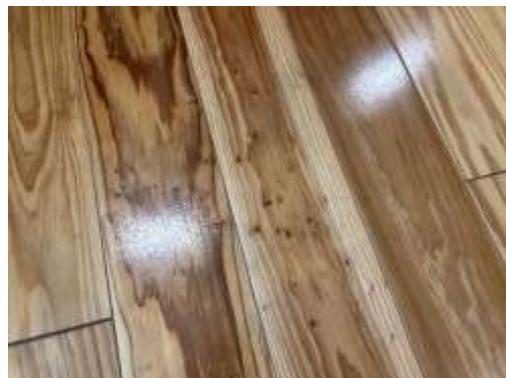
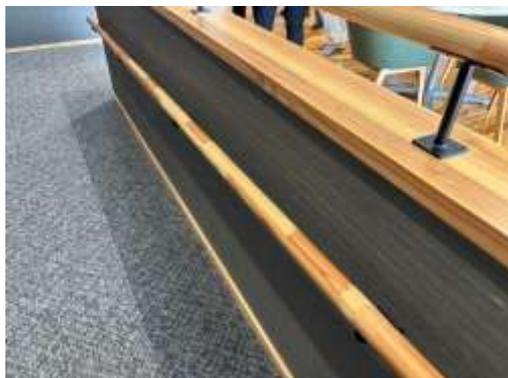
庁舎には 約 150 リューバー(150 m³程度)の八女材が使用され、2年前の構想段階から市が「八女材を使ってほしい」と要望したことで、設計段階で使用量を概算し森林組合に調達を依頼して確保していたということです。

待合ホールの床には、八女杉を特殊圧縮加工したフローリングを採用。厚さ 12mm の板を約

60%に圧縮(4.8mm)することで、ナラやブナの約2倍の表面強度を確保し、公共施設でも耐久性と温かみを両立させています。



木材は市内の製材所で分担して製材され、地域全体で森の価値を活かす取り組みが行われました。

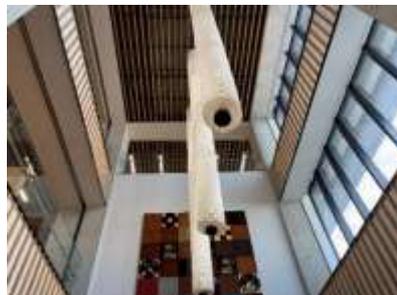


議会室や会議室の床は自然な杉の風合いを活かした仕上げで、落ち着きのある空間を演出。手すりや細部の工法にも丁寧さが感じられ、空間全体に品格を与えています。





3階吹き抜けの「情報の町家」には、八女仏壇用の漆塗り杉パネルや金物、手すき和紙、竹細工などの八女の伝統工芸品が配置され、地域の工芸と木材活用が見事に融合しています。



庁舎は Nearly ZEB 認証を取得し、省エネルギー設計と自然エネルギー利用を両立。木製ルーバーによる日射遮蔽や非常用発電設備も備え、災害時の事業継続(BCP)にも対応しています。



今回の視察で印象的だったのは、木材の温もりと行政機能の両立だけでなく、構想段階から計画的に進められた八女材活用と林業連携が確実に実現されている点です。庁舎内にあるテーブルや椅子、おもちゃなども市主導で準備したそうで、賑わいを創り安心して心豊かに暮らせる郷土(くに)づくりの拠点として八女材を全面に活用した市庁舎が完成したということです。



市民向け見学会や木工体験を開催しているとのことで、八女材の魅力と森林資源活用の意義をさらに伝えていく仕組みが作られていることがわかりました。



【モリタインテリア工業視察】

女性に人気のセンダン家具と環境配慮型ものづくり —



大川市のモリタインテリア工業の視察。同社の家具づくりや木造建築への取り組みについて伺いました。大川は約480年の木工の歴史を持つ日本有数の家具産地で、技術力とデザイン性を融合させた「大川家具」として知られています。その中で同社は、伝統を受け継ぎながら新素材の可能性を追求する企業として注目を集めています。



同社は3年前から展開している「9×9(くく)」シリーズで、早生広葉樹センダン材を前面に押し出し、特に女性層の顧客から好評を得ています。センダン材は成長が早く、美しい木目と加工性の高さから家具材として評価されており、歩留まりやデザイン戦略にも工夫が施されてい

ます。また、地域で進められる植樹から製品化までの「[セندانサイクル](#)」や、地域プロジェクト「SENDAN」への参画にも意欲的に取り組んでいます。



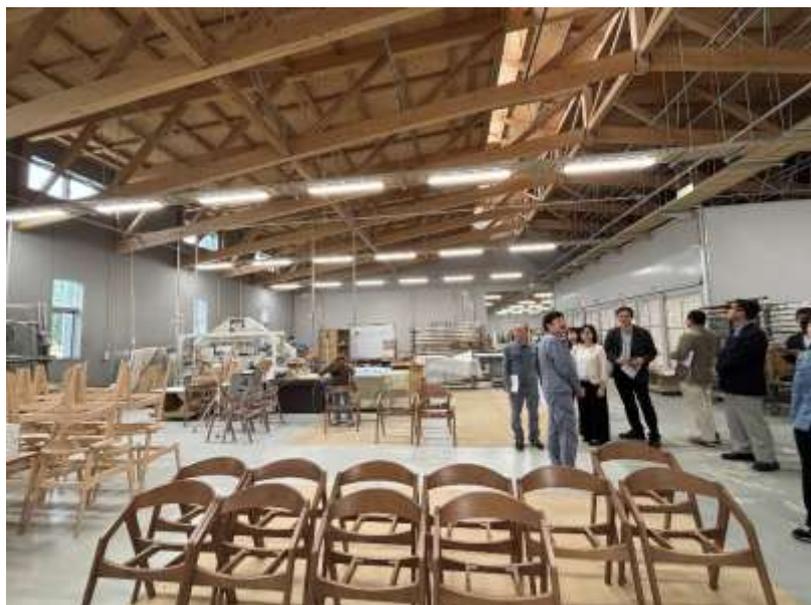
工場は合理化・省力化を意識した体制で運営されており、コントラクト事業への対応や自社デザイナーの在籍により、設計から製造、仕上げまで一貫して行える体制が整っています。ショールームと工場が連携することで、製品開発の過程を直に確認できる仕組みも特徴です。



加えて、同社は福岡県のワンヘルス宣言事業者に登録されており、環境保護の取り組みとして「森林の整備」や「県産木材の活用」なども掲げていることから、地域資源を生かした持続可能なものづくりを進めていることがわかります。



同時に印象的だったのは、木造作業所の存在です。作業所は梁に無垢材を用いたしっかりとした構造で、内部は高い天井と大きな開口部により明るく開放的です。作業環境であっても木の落ち着きが感じられます。家具づくりと建物が自然に調和しており、木の空間づくりへのこだわりを実感できました。





今回の視察を通じ、同社が家具づくりにとどまらず、木造建築や環境保護を含めた“木の空間づくり”を総合的に提案し、地域材の価値を広げていることを改めて感じました。



【九州木材工業株式会社 視察報告】

— 技術と企業文化を学ぶ —

1日目の視察行程の最後は、筑後市に本社を置く九州木材工業株式会社を視察しました。前後の関係で遅れての到着でしたが、社員の皆さんがそろってお出迎えいただきました。



九州木材工業株式会社は、国産材の有効利用や林業活性化、森林資源の循環を重視し、建材・土木資材・園芸資材など幅広い木材製品を提供する企業です、木材の長寿命化に長年取り組み、地域材活用を通じて持続可能な森林との共生を目指しているとのことでした。



到着後、まず会議室にて社歴や商品についてご説明を受けました。

同社は、1990年代末から国内に多くあった間伐材や地域材(杉・桧など)の有効活用に向け、割れ・腐朽・寸法変化や環境負荷のある薬剤依存といった技術課題の克服に取り組んできたとの事です。その研究の成果として生まれたのがエコアコールウッド。低分子フェノール樹脂を用いた安全かつ耐久性の高い保存処理木材で、住宅用建材、公共施設、土木資材、景観施設材、太陽光架台材、木製ガードレールなど、幅広い用途に展開されています。



近年の脱炭素・サステナブル建築への関心の高まりも受け、「木材利用拡大」「木造建築の普及」「国産材活用による森林循環」の推進に貢献する製品として期待されています。



会社構内には、エコアコールの経年変化を実験する柵も設置され、長期使用を見据えた研究の様子を実際に確認できました。また、加圧式防腐・防蟻処理の仕組みや用途別材の選定、品質管理のポイントなどについて担当者から詳しく説明を受け、技術理解を深めることができました。



福岡県のワンヘルス宣言事業者であるとのこと。日頃から清掃・美化活動に取り組んでおり、構内は整理整頓が行き届き、通路や資材置き場まで清潔に保たれているとのことでした。社員の皆さまは「きれいな職場が安全と品質につながる」と意識しており、サイレンが鳴ると全

員で清掃を始める姿も印象的で、ワンヘルス宣言事業者としての理念が日々の活動に表れていることが伺えました。



今回の視察では、理念や技術、製品開発、現場での取り組みを間近で学ぶことができ、木材利用や建材選びについて改めて考える良い機会となりました。



1日目総括

今回の視察を通じ、各社や森林組合の取り組みを間近で学ぶことができ、木材の管理や活用、林業と地域社会の連携の重要性を改めて実感しました。

また、持続可能な森林経営や環境保全、地域材活用を日々の活動に反映させている現場の姿勢から、林業と市民生活・建築・ものづくりが一体となった循環型の取り組みの意義を強く感じる機会となりました。

今後の木材利用や地域材活用を考える上で、大変参考になる視察となりました。

—10月24日(金) 福岡市→大宰府市→福岡市—
【竹中工務店警固竹友寮(2023年 WD 賞受賞作品)】



都市木造のこれからを示す、通り土間のある集合住宅

2023年に竣工し、ウッドデザイン賞2023を受賞した警固竹友寮。この建築は、竹中工務店が手がけた5階建て・木造+RCのハイブリッド構造による都市型集合住宅であり、その設計には同社福岡支店設計部が関わっています。

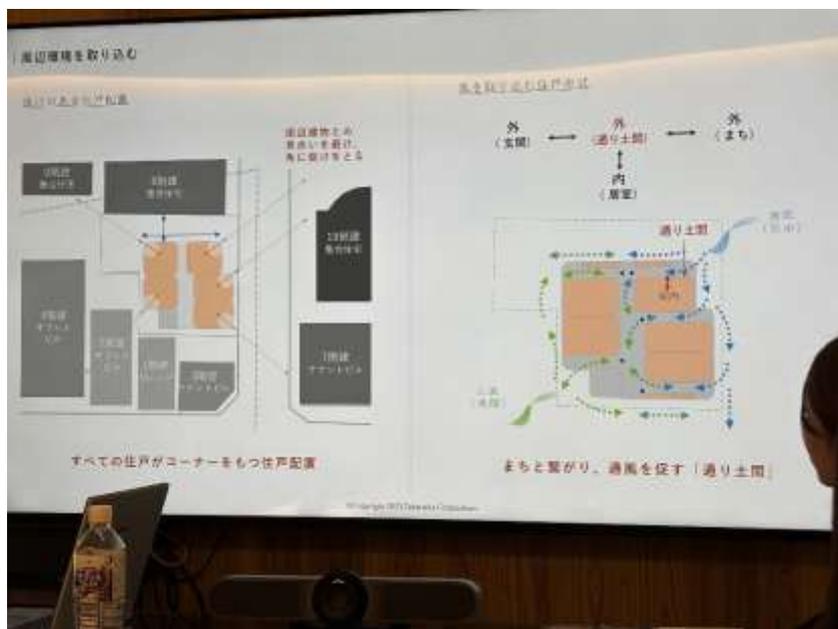
見学は施設規模を考え、2班に分かれて見学させていただきました。



空間のコンセプト — “通り土間”でつなく、まちと住まい

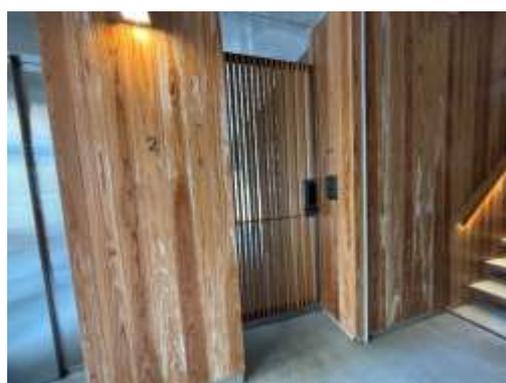
警固のまちは、細い路地や小さな建物が隣接する密集した街並みを特徴とします。利便性の高い都市の中心にありながら、落ち着いた住環境と緑があります。設計チームは、この「まちのス

ケール感・路地の風景」を建物に取り込むことを意図しました。具体的には、各住戸に「通り土間」と呼ばれる細長い土間空間を設け、建物内部に“街の通り”を再現することで、住まいとまち、人と人とのつながりをゆるやかに保つ集合住宅を目指しています。

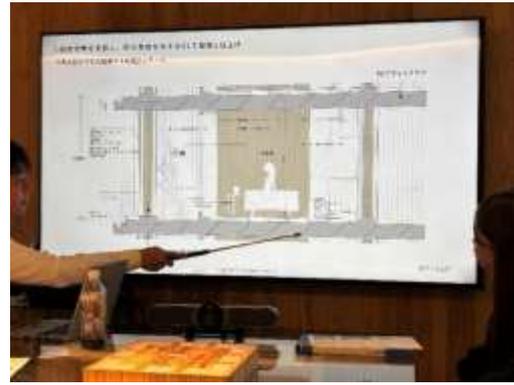


この通り土間は、ただの通路ではなく、光や風を取り込み、縁側や前庭のような役割を果たす余白として機能する設計です。都市の密集地においても、住まいに“余地”と“つながり”をもたらすこのアイデアは、都市木造住宅の新しい方向性を示していると思います。

構造と技術 — 耐火 CLT 壁 × RC 床によるハイブリッド



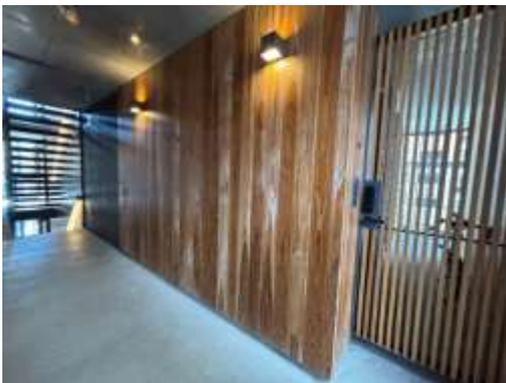
構造は、同社が開発した耐火集成材「燃エンウッド®CLT 耐力壁」を採用した CLT 壁式構造と、鉄筋コンクリート造の RC 無梁版スラブを組み合わせたハイブリッドです。これにより、木質の温もりや質感を活かしつつ、都市部で求められる耐火性・遮音性・耐震性を確保しています。



この構造設計によって、壁や柱に縛られない自由なプランが可能となり、通り土間を含む住戸構成や居住環境の設計が実現。木造でありながら、集合住宅としての性能・安全性を妥協しない設計手法が貫かれています。

サステナビリティと住まいの価値

警固竹友寮は、木造耐火建築として炭素の長期固定化に貢献するとともに、都市部で木材を活かす意義を示す住まいです。通り土間による通風や自然光の導入は冷房負荷の削減にもつながり、環境負荷低減と住み心地向上を両立しています。



実際、受賞概要でも「無理のない木の使い方」「木視率の抑えた内装」「通風・省エネルギー設計」が高く評価されています。

また、設計を担当した木下氏は、「都市における木造の可能性」「都市住宅としての木の住まいのあり方」を追求する設計意図を持っていたとオンラインの説明で語っており、この建物はその思想を体現する成果だと受け止められます。

— 都市木造の新たな基準となる建築

警固竹友寮は、木造住宅の“ぬくもり”と、都市集合住宅の“性能と安全性”を高い次元で融合させた建築です。設計者による住環境の質、構造技術、環境配慮のすべてがそろったこの

竹友寮を活用し、竹中工務店の取り組みでもある「森林グランドサイクル」を通して、まちとの関係性の構築を実現しており、今後の都市木造住宅のモデルケースとなるにふさわしいと思います。



都市で木造住宅を検討する際、「木の住まいの快適さ」を犠牲にせず、「安心・安全」も確保するという選択肢を示しています。



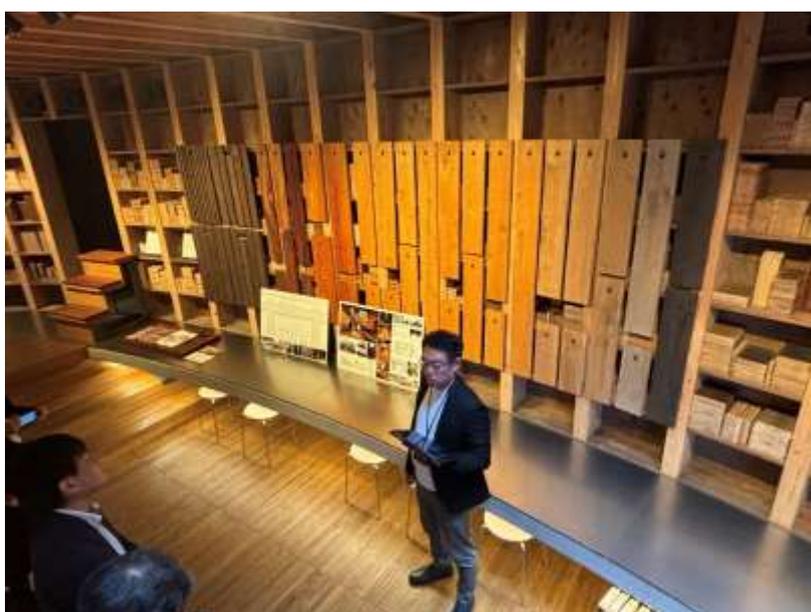
【マルホン福岡ショールーム】

—“木の質感を確かめる”ための体験型空間

浄水通りの落ち着いた街並みに溶け込む外観は開放的で、扉を開けた瞬間、船底のような木空間が目に飛び込み、空気がふっと柔らかく変わります。無垢材特有の香りが漂い、まるで森の空気をそのまま持ち込んだような印象でした。



館内は「木のギャラリー」と呼ぶにふさわしい構成で、壁・床・天井材を中心に国内外の樹種が整然と展示されています。今回はスタッフの案内を受けながら一つひとつのサンプルを確認し、写真では分からない木肌の艶、節の出方、年輪の表情がよく理解できました。



特に印象的だったのは、靴を脱いで踏み比べる“敷き込みサンプル”コーナーだ。広葉樹・針葉樹それぞれの堅さや反発感、足裏に伝わる温度の違いが明確で、空間の用途に応じた材選び

の重要性を再認識しました。



また、木材の経年変化サンプルでは、新材・使用数年後・オイル塗装後の比較ができ、実際の住空間でどのように風合いが変化するかを立体的に捉えられました。FSC 認証材や地域材の取り扱い、施工事例まで紹介していただき、素材選定の幅広さを実感させられました。



アクセスは薬院大通駅から徒歩圏内で、落ち着いた環境ですので、無垢材を使った空間づくりを検討する建築関係者や施主にとって、実物に触れながらじっくり選定できる貴重なショールームだと感じました。



太宰府天満宮「令和の大改修」——伝統技法が息づく“未来への再生”

(※本殿作業所は非公開につき、公開資料・現地観察をもとに構成)

太宰府天満宮で進む124年ぶりの「令和の大改修」を視察しました。境内に立つとまず目に入るのは、期間限定の仮殿。その屋根には梅をはじめとする多様な植物が植えられ、まるで“浮かぶ森”のような存在感を放っていました。現代建築ならではの軽やかさと、神社特有の静謐が共存するたたずまいは参拝者を惹きつけ、多くの人が写真を撮っていました。



今回の改修の中心は、本殿の屋根の全面的な葺き替え。太宰府天満宮の屋根は檜皮葺きであり、長い年月を経て摩耗した檜皮を取り除き、新しいものへと張り替える必要があり、定期的に改修を行っています。

この作業には「檜皮師(ひわだし)」と呼ばれる専門の職人が携わっています。檜皮は一枚一枚、檜の木から丁寧に剥ぎ取られた天然素材で、厚み・しなり・繊維の方向など、どれ一つとして同じものはなく、そのため、葺き替えでは“素材を見極めながら最適な位置へ配していく”という高度な判断力が求められます。



檜皮葺きの工程では、まず古い檜皮を専用のヘラで数センチずつ慎重に剥がしていきます。次に、新しい檜皮を重ね、竹釘で固定します。

この竹釘の打ち込み角度や深さが屋根の耐久性を大きく左右するため、職人は微妙な手の感覚を頼りに作業を進め、特に、雨仕舞いを意識した“重ねの深さ”と“段差の作らなさ”は熟練の技が必要であり、機械化では絶対に再現できない部分だといわれています。また、檜皮を重ねる量を均一に保つことで、屋根の曲線美と陰影が整い、神社建築独特の柔らかな表情が生まれるそうです。



こうした伝統工法は、数百年前からほとんど形を変えておらず、材料の調達から、職人の技、檜皮の扱い方に至るまで、一つひとつが文化財を未来につなぐ重要な営みです。作業は時間も手間もかかるが、それこそが日本建築の本質なのだと改めて感じさせられました。

現在の仮殿は、藤本壮介氏の設計により“現代の神殿”を象徴する美しさを見せています。一方で、その背後では、古式ゆかしい技術によって本殿が静かに再生されている対比に感動を覚えます。

革新と伝統が境内の中で同時に進行している光景は、まさに太宰府天満宮が持つ“千年の時の流れ”そのものです。



(リリース資料より)



今回の大改修は単なる修繕ではなく、未来へと神社を受け渡す文化的使命を帯びていると感じます。100年後、この改修を支えた職人の技が、確かに本殿を守り続けている——そのことを想像しながら境内を歩くと、胸に深い感動が生まれました。

90



ご神木



夫婦樟

大宰府天満宮参道スターバックス — 外観から感じる木組み建築の魅力



大宰府天満宮の参道を進むと、伝統的な街並みの中に、現代的でありながら周囲に溶け込む独特のスターバックスが姿を現します。

木材を巧みに組み合わせたファサードが目を引き、この建物が地域の風景と対話する建築であることがすぐに伝わってきます。

特徴的なのは、無数の木材が立体的に交差しながら連続する構造です。

前後・上下に流れる木組みは参道の人々の動きと呼応するようで、自然の中に生まれたリズムのような軽やかさがあります。一本一本の木材が光を受けて陰影をつくり、時間とともに表情が変化する点も魅力だ。木という素材が持つ温かさと、現代的な構成美が心地よく融合しています。



周囲の伝統的な街並みとの調和も見どころで、主張しすぎず、しかし確かな存在感を放ち、写真を撮りたくなる建築でありながら、地域の歴史や景観への敬意がしっかりと感じられます。外観を眺めるだけで「現代建築が地域に寄り添う」とはどういうことかを教えてくれるようでした。木の持つ普遍的な魅力と新しいデザインが共存する、印象深い一軒で、新旧が混在する街並みにも溶け込んでいました。



【福岡おもちゃ美術館】

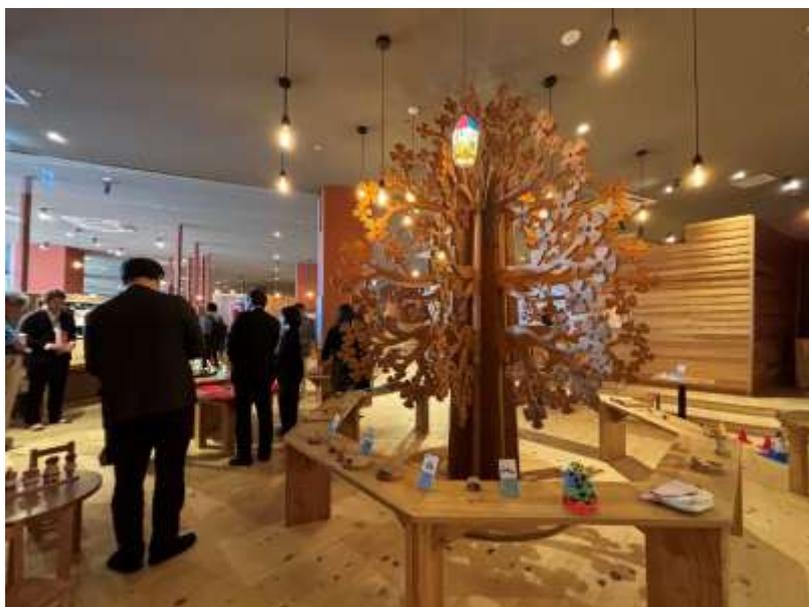
— 木と遊びが響き合う“森のような建築”木の世界へ一歩踏み込む空間



福岡市・ららぽーと福岡のオーバルパークにある福岡おもちゃ美術館は、商業施設の中とは思えない“木の余白”を感じさせる場所でした。

館内へ入ると外の喧騒が遠のき、木の香りに包まれた柔らかな空気に切り替わりました。

無垢材の床は光を反射して温度を伝え、子どもたちが裸足で歩く姿から、素材の安心感が自然と伝わってきました。



回遊できる館内動線

中心には九州産材をふんだんに用いた「木の広場」があり、走り回る子どもを見守れるよう見通しのよい配置が特徴。

周囲には「木の砂場」「ごっこ遊び」「赤ちゃん木育」などのゾーンが緩やかにつながり、興味の赴くままに遊びを選べる回遊型の構成となっている。奥には木工ワークショップがあり、親子が木と向き合う姿をガラス越しに眺められるようになっていました。



施設全体が“木育”の教材

この施設の魅力は、木を単なる素材ではなく“学びそのもの”として扱っている点にありました。

樹種による色の違い、触れたときの温度、木の響きがつくる音環境、丸みを帯びた安全な加工など、すべてが子どもに自然素材の魅力を伝えていました。特に、細かい木片を使った「木の砂場」は象徴的で、遊びながら木の香りや質感を体験させるような工夫がありました。



港町・博多の歴史や、日本の舟文化を「木のおそび」を通して伝える、福岡らしい展示・

都市に生まれた木のオアシス

地域との連携もとりいれ、地域の名産や特色を木で表現してるところが楽しく、おとなもつい夢中になってしまいます。





・博多の食文化や屋台のにぎわいを、木のあそびで体験できる福岡らしい展示・

福岡おもちゃ美術館は、建築の中で木の特性を最大限に活かし、“木を通じて人を育てる”という理念を見事に体現している。都市の中心にありながら、まるで森のそばで遊んでいるような安らぎを生む、稀有な木育拠点でした



【日本ウッドデザイン協会「WOOD DESIGN EXPERIENCE@福岡」】

日本の豊かな木材資源を活かし、スギやヒノキ材を中心とした木材利用に実際に触れていただくことにより、花粉の少ないスギへ植え替えによる花粉症対策、カーボンニュートラルへの貢献、SDGsの取り組み、自然災害防止などにつながることを「体験」「実感」「共感」する展示会。

開催を見学しました。



【2日目総評】

— 多様な現場に見る「木」の実装力

視察2日目は、都市住宅、商業空間、文化財、教育施設と、性格の異なる場を巡りながら、木が現代社会の中でどのように機能しているのかを多角的に確認する一日となった。

警固竹友寮では、都市集合住宅という制約の多い条件下において、木造が性能・安全性・快適性を高い水準で両立できることが具体的に示された。通り土間の設計は、都市と住まい、人との関係性を緩やかにつなぐ空間的提案として印象的である。

マルホン福岡ショールームでは、木を「選び、確かめる」体験が丁寧に設計され、素材理解の重要性を再認識した。

太宰府天満宮の令和の大改修では、伝統技法と現代建築が同時に存在し、日本建築文化が未来へ受け継がれていく過程を実感した。

また、参道のスターバックスや福岡おもちゃ美術館では、木が景観形成や木育を通じて、人の行動や感情に自然に寄り添う素材であることが示されていた。

本日の視察を通じ、木は単なる建材ではなく、都市・文化・教育を横断する価値創出の媒体であることが明確になった。

ウッドデザインの広がりの実装の深まりを感じさせる、意義深い一日であった。

2 日間総評

— 川上から都市までを貫く、福岡における木の循環と実装力 —

本視察会は、福岡県における森林・林業から製材、ものづくり、建築、文化・教育施設に至るまで、木材利用の流れを「川上から川下まで」一貫して確認できる、密度の高い2日間となった。1日目は、八女地域を中心に、森林組合による広域的な森林経営、地域材を計画的に活用した公共建築、早生広葉樹や不燃木といった新たな技術・素材を取り入れたものづくりの現場を視察した。そこでは、単なる資源利用にとどまらず、再造林や人材育成、地域産業との連携を含めた「持続可能な循環」を現実の仕組みとして成立させようとする姿勢が明確に示されていた。

2日目は、都市部に舞台を移し、集合住宅、商業空間、文化財、教育施設といった多様なフィールドで、木がどのように社会実装されているかを確認した。警固竹友寮に代表される都市木造建築では、性能・安全性・快適性を高い水準で両立する技術と設計思想が示され、木造の可能性が都市スケールで現実のものとなっていることを実感した。また、太宰府天満宮の大改修では、伝統技法が今なお生きた技術として継承されている姿に、日本の木造文化の時間軸の長さや重みを感じさせられた。

両日を通して印象的だったのは、木が単なる素材としてではなく、**地域をつなぎ、人を育て、文化を支える「媒介」として機能している点**である。福岡では、行政、企業、職人、設計者がそれぞれの立場で役割を果たしながら、木材利用を現実的かつ継続的な取り組みとして成立させていた。

本視察会は、ウッドデザインが理念や表現にとどまらず、社会の中で「どう使われ、どう続いていくのか」を具体的に示す好例であり、今後の木材利用や建築、地域連携を考える上で、多くの示唆を与えるものとなった。